Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2022, Vol. 24, 63-72.

論　文

乳幼児を育てる母親において、子育てにおける怒り表出と子育てにおける怒り表出評価、子育て観の関連

角野　優穂・藤崎　春代

Relationship between anger expression and the evaluation of anger expression in child-rearing and child-rearing values of infants mothers

Yuho SUMINO and Haruyo FUJISAKI

A questionnaire survey was conducted with infants mothers to examine relationships between anger expression in child-rearing, the evaluation of anger expression in child-rearing, and child-rearing values. We evaluated seven types of anger-expression items, which were correlated. Therefore, we considered these items were not independent but combined patterns. Consequently, we conducted a cluster analysis, which indicated four types of expressions groups (high anger expression, low anger expression, moderate anger, verbal expression of mild anger, and communication blocking). The results indicated that anger expression characteristics in child-rearing and child-rearing values differed depending on the pattern. We concluded that it is necessary to consider behaviors and cognitions when investigating anger expression.

Key words : anger expression in child-rearing（子育てにおける怒り表出）,
evaluation of anger expression（怒り表出評価）, child-rearing values（子育て観）,
infants（乳幼児）

問題と目的

子育てにおける怒りへの着目

人間は、様々な場面で怒りを感じ表出する。それは子育て場面でも同様であり、我が子の成長を実感することなどで「楽しい」などの快感情を経験できる一方で、怒りなどの不快感情も経験するであろう。怒りには、怒りを感じること（以下、怒り感情）と怒りを表すこと（以下、怒り表出）の2種類があり、子育てにおける怒りにおいても、怒り感情と怒り表出の2つの側面があると想定するが、子育てにおける怒り感情については多くの先行研；;高濱・渡辺, 2007)、怒り表出についてはあまり多く行われていない。そこで、本研究では、乳幼児を育てる母親の子育てにおける怒り表出に着目する。

青年期以降を対象とした怒り表出に関する研究は古くからなされているものの（Averill, 1982；木野, 2000)、怒りを表出する相手が子どもである研究はあまり多くない。江上（2005）の研究でも参考にしている鈴木・春木（1994）は、通院中の循環器系疾患患者と健常者を対象に怒りを測定するにあたり、「怒りの表出」「怒りの抑制」「怒りの制御」の3因子からなる怒り表出尺度（AX）を作成した。本研究では怒りの表出方法に着目するため、「怒りの表出」因子のみ参考にする。子育てにおいてどのような怒り表出がなされているのかについて、高濱・渡辺（2007）は、1歳から3歳の子どもを持つ母親を対象に検討を行い、「子どもが納得できるように言い方をいろいろと変えて説得を試みる」等の一般的に洗練された自己主張を育てるとされる対応と、「『もう知りません』といってしばらく無視する」「腹が立って本気で怒ってしまう」等の反抗や自己主張を押さえ込んでしまうとされる対応とが行われていること、「いうことを聞かせるために脅しを加える」「いう

ことを聞かせるために体罰を加える」等も用いる程度は低いが行われていることを明らかにした。本研究においても、怒り表出の仕方（以下、怒り表出項目）に「無視する」や「たたく」ことも含めて検討することとする。

子育てにおける怒り表出の背景

湯川（2008）は、怒り表出行動の背景には、その人が所属する文化、状況要因（怒りの要因、第三者の存在）、相手との関係、性別、信念、表出行動に対する認知的評価などが関係していると指摘している。この指摘をもとに、本研究では「怒り表出の認知的評価」「信念」の2つに着目する。

怒り表出の認知的評価については、杉本・並木（2014）が、幼児を持つ母親を対象に、子育てをしているときの怒り感情の抑制・評価について検討している。怒り感情を抑制せず表出する母親は怒り感情の必要性を評価していること、他者懸念と怒り感情抑制の間には有意な相関がみられないことが明らかとなり、この結果から、怒り表出と評価が関連している側面があること、必要性を感じている人は怒り感情を抑制しないこと、他者の存在は怒り感情の抑制には関係がないことが考えられる。そこで、杉本・並木（2014）を参考に、本研究では、〈必要性〉因子（「怒りを表出することは必要である」等）、〈自然体〉因子（「怒りを表出することはあってもいい」等）、〈自己批判〉因子（「怒りを表出することはみっともない」等）、〈負担感〉因子（「怒りを表出するのはやっかいなことだ」等）の4因子を想定する。〈必要性〉因子と〈自然体〉因子について、先行研究では「必要性」という一つの因子にまとまっていたが、「怒りを感じることはあってもいいと思う」などの一部の項目については、必要性ほどの強い意志ではなく肯定的にとらえている程度の項目も含まれていたため、〈必要性〉と〈自然体〉の2因子を想定する。〈自己批判〉因子について、先行研究では「他者懸念」因子としていたが、本研究で検討することは怒り表出であり、怒り表出をするという行動についての評価であるため、他者の存在を想定したものではなく、自分が起こした行動に関することという理由で〈自己批判〉因子とする。加えて、表出項目の教示文における場面設定についても、他者の存在は想定しない。

子育てにおける信念には、親役割観や子ども観、子育て観など様々なものがあるが、本研究では、子育て観について検討する。怒り表出をする相手が大人ではなく子どもである場合、対等の関係ではないこと、言語理解不十分な相手であること、親子関係という特定の関係がある状態であることから、関係性が重要であり、子育てにおける信念の中で子育て観は親と子どもの関係についての考え方であると考えられるため、子育て観に着目する。加えて本研究では、子育て観を「子どもを育てることについての考えや信念」と定義する。子育て観については、数多くの先行研究があるが、福丸・無藤・飯長（1999）の研究では、乳幼児の子どもを持つ父母を対象に、大野・柏木・若松・岡松（1996）の質問項目をもとに作成された子ども観尺度について父母別に因子分析を行い、「充実・楽しみ」「制約・負担」「社会的存在」「生きがい」「無関心・低価値」のいずれも5因子が抽出された。本田（2004）は、大学生とその父母を対象に子ども観と親イメージ観の関係を検討するにあたり、子ども観尺度を作成して、母親については、『生き甲斐としての子』『社会規範としての子』『自己完成としての子』『枷・お荷物としての子』の4因子を見出した。牧野・中野・柏木（1996）は、幼稚園児・保育園児の父母を対象に、子どもの価値尺度を作成し、養育行動の柔軟性項目・育児参加度との関連を検討している。子ども観とも重なる子どもの価値尺度には『負担・制約』『支え・生きがい』『分身』『社会的存在』『当然・自然』『充実・楽しみ』の6因子が抽出されている。また、育児参加度の項目に「いけないことをしたときに叱る」といったしつけの項目があり、『しつけ』の対象とする子ども観があることがうかがえる。これらの研究を参考に、本研究においては、『負担・制約』『子どもは分身』『役割・使命』『充実・生きがい』『しつけ』の5因子を想定する。また、上記の研究に加えて、乳幼児を持つ親に対して子育て観尺度の開発を目的とした陳・森・望月・柏原・安藤・大月（2006）で使用された「子どもの世話をすることで子どもの成長を感じることができる」といった項目など、想定される因子にあてはまる項目を一部使用する。

目的

乳幼児を育てる母親を対象として質問紙調査を行い、どのような怒り表出項目が用いられているのかを調べるとともに、子育てにおける怒り表出の評価と子育て観という認知的側面との関連を検討する。なお、怒り表出項目は、それぞれが単独で用いられるのではなく、組み合わせて用いられることが推測されるため、怒り表出パターンについても探索的に検討する。上記の目的のために、子育てにおける怒り表出項目、子育てにおける怒り表出評価尺度、子育て観尺度を作成する。

方　法

調査対象

神奈川県内公立保育園2園に通う2歳児～5歳児クラスの子どもの保護者、および2園に勤務する子どもを持つ保育者を対象とした。配布数は186、回収数は120（回収率64.5％）であった。回答の不備、父親を除いた、母親112名を対象とした。母親の平均年齢は38.11歳（$SD = 4.48$）（年齢不明3名）であった。子どもの人数は2名（55.4％）が最も多く、1名（28.6％）、3名以上（16.0％）であった。性別は、男子55名（49.1％）、女子55名（49.1％）、不明2名（1.8％）であった。

調査時期・調査方法

2019年8月～9月に実施した。園に調査を依頼し許可を得た後に、園を通して無記名自記式質問用紙を配布し、自宅で記入後、調査実施者宛てに郵送をしていただいた。

調査内容

調査は以下の項目から構成されている。1）フェイスシート：養育者と子どもの続柄、養育者の年齢、子どもの人数、子どもの年齢・性別について質問した。子どもが複数名在園している場合は、一番年齢の低い子どもについて回答を求めた。2）子育てにおける怒り表出項目：鈴木・春木（1994）、木野（2000）、高濱・渡辺（2007）を参考に作成した。「『あなたのお子さんがわがままを言って、あなたの言うことを聞きません。数回注意しましたが、お子さんは聞き入れようとしません。』上記のような状態のお子さんに対して、あなたは以下のような行動をどの程度しますか」と場面想定法による教示を行った。《大声で怒鳴る（怒鳴る、と略す。以下同様）》《「もう知りません」といってしばらく無視する（無視）》《子どもの言動に対して嫌味を言う（言動に嫌味）》《子どもに対して皮肉をいう（子どもに皮肉）》《子どもの好きなものを取り上げる（取り上げ）》《ドアをばたんと閉めるような、荒々しいことをする（物に当たる）》《たたく》の7項目について「1. 全くしない～4. いつもする」の4件法である。3）子育てにおける怒り表出評価尺度：杉本・並木（2014）を参考に作成した。想定した因子構造は〈必要性〉〈自然体〉〈自己批判〉〈負担感〉の4因子である。17項目で、「1. あてはまらない～5. あてはまる」の5件法である。4）子育て観尺度：牧野他（1996）、陳他（2006）、本田（2004）、福丸他（1999）を参考に作成した。想定した因子構造は『負担・制約』『子どもは分身』『充実・生きがい』『役割・使命』『しつけ』の5因子である。31項目で、「1. あてはまらない～5. あてはまる」の5件法である。

倫理的配慮

昭和女子大学の倫理委員会の承認を得た（承認番号19-18）。調査にあたっては、まず各園長に個人情報の保護等の倫理的配慮について文書にて説明を行った。各調査協力者に対しても、同様の内容を質問紙の表紙に記載し、回答をもって同意とみなした。また、結果に関しては後日書面にて報告することを質問紙の表紙に示した。

結果と考察

1．子育てにおける怒り表出項目の作成

怒り表出項目別に記述統計と表出の有無別人数を表1に示す。有群は「2. たまにする」「3. よくする」「4. いつもする」の回答をまとめている。無回答については、項目得点を中間の2.5とし、有群に分けた。《怒鳴る》《無視》は8割前後の母親が表出しており、《言動に嫌味》《子どもに皮肉》も、半数を超える母親が子育ての中で用いていることが分かった。その一方で、《取り上げ》《物に当たる》《たたく》の項目については、用いている母親は半数以下であった。怒り表出につい

表１　子育てにおける怒り表出項目の記述統計と表出有無別人数

	平均値	*SD*	最小値	最大値	表出の有無	
					無	有
怒鳴る	2.13	0.69	1	4	16 (14.3%)	96 (85.7%)
無視	2.03	0.73	1	4	26 (23.2%)	86 (76.8%)
言動に嫌味	1.72	0.68	1	4	45 (40.2%)	67 (59.8%)
子どもに皮肉	1.60	0.67	1	3	56 (50%)	56 (50%)
取り上げ	1.51	0.66	1	3	65 (58.0%)	47 (42.0%)
物に当たる	1.50	0.60	1	3	62 (55.4%)	50 (44.6%)
たたく	1.32	0.47	1	2	76 (67.9%)	36 (32.1%)

表２　子育てにおける怒り表出項目間の相関

	怒鳴る	言動に嫌味	子どもに皮肉	無視	取り上げ	物に当たる	たたく
怒鳴る		.46**	.49**	.30**	.23*	.42**	.39**
言動に嫌味			.79**	.25**	.29**	.51**	.09
子どもに皮肉				.25**	.25**	.50**	.18
無視					.29**	.29**	.13
取り上げ						.15	.17
物に当たる							.16
たたく							

**は１％水準で有意、*は5％水準で有意

ては多く用いられている項目もあれば、用いられていることが少ない項目もあることが明らかとなった。《たたく》という怒り表出項目について、多くの母親が用いていない一方で、用いている人も一定数いることが分かった。ただし、最大値は2の「たまにする」であり、今回の対象者については高い頻度ではない。

子育てにおける怒り表出項目の表出程度について、項目間の相関係数を算出したところ（表２）、《怒鳴る》はすべての項目と有意な相関があり、その他の多くの項目間でも表出程度に有意な相関がみられた。この結果から、怒り表出は一つのみを用いるのではなく、いくつかの項目を組み合わせて表出している可能性が考えられる。一方で、《たたく》については、《怒鳴る》と有意な正の相関がみられたが、その他の項目との間に有意な相関はみられなかった。このことから、《たたく》は、他の表出項目とは独立して用いられている項目であると思われる。

２．子育てにおける怒り表出評価尺度の作成

子育てにおける怒り表出評価尺度作成のため、最尤法を用いて因子分析を試みたが、仮説に合致するような因子のまとまりが得られなかった。そこで、杉本・並木（2014）を参考に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットから３因子構造が妥当であると考えられたため、３因子を固定して再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量（.35以上）を示さなかった、あるいは複数の因子に対して、.35以上の負荷量を示した４項目を分析から除外し、因子分析を主因子法・プロマックス回転で行った。最終的な因子行列を表３に示す。第１因子は、「怒りを表出することはみっともない」や「怒りを表出することは大人げない」等、自身の行為を批判することに関連する項目であるため、〈自己批判〉因子とした。第２因子は、「怒りを表出することは必要である」や「怒りを表出することはいいことだ」等、怒り表出に必要性を感じていることに関

表 3　子育てにおける怒り表出評価尺度の因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3
怒りを表出することはみっともない。	**0.95**	0.01	−0.07
怒りを表出することは大人げない。	**0.95**	0.10	−0.08
怒りを表出することは情けない。	**0.74**	−0.07	0.01
怒りを表出することは恥ずかしい。	**0.70**	−0.06	0.03
怒りを表出することは必要である。	−0.01	**0.84**	0.00
怒りを表出することはなくてはならないことだ。	0.18	**0.67**	−0.02
怒りを表出することはあったほうがいい。	−0.06	**0.64**	0.00
怒りを表出することはいいことだ。	−0.17	**0.58**	−0.01
怒りを表出することは仕方がない。	0.00	**0.56**	0.01
怒りを表出することに負担感がある。	−0.09	0.05	**0.97**
怒りを表出することは疲れることだ。	−0.13	−0.06	**0.55**
怒りを表出することはつらいことだ。	0.29	−0.04	**0.51**
怒りを表出することはやっかいなことだ。	0.31	0.03	**0.46**

連する項目であるため、〈必要性〉因子とした。第 3 因子は、「怒りを表出することに負担感がある」や「怒りを表出することは疲れることだ」等、怒り表出に負担を感じていることに関連する項目であるため、〈負担感〉因子とした。内的整合性を検討するために α 係数を算出した結果、〈自己批判〉因子は.89、〈必要性〉因子は.79、〈負担感〉因子は.75 と十分な値が得られた。さらに、子育てにおける怒り表出評価尺度の 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、〈自己批判〉因子得点（平均値2.83, $SD = 1.05$）、〈必要性〉因子得点（平均値3.27, $SD = .76$）、〈負担感〉因子得点（平均値3.46, $SD = .82$）とした。

3．子育て観尺度の作成

5 件法の回答において、天井効果があり、かつ最小値が 3 である 4 項目と、床効果があり、かつ最大値が 3 である 1 項目の計 5 項目を削除し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットから 4 因子構造が妥当であると考えられたため、4 因子を固定して再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量（.35 以上）を示さなかった、あるいは複数の因子に対して、.35 以上の負荷量を示した 9 項目を分析から除外し、因子分析を最尤法・プロマックス回転で行った。最終的な因子行列を表 4 に示す。第 1 因子は、「子どもを育てることは負担だ」や「子どもを持つと精神的に休まらない」等、子育てでの負担や制約に関連する項目であるため、『負担・制約』因子とした。第 2 因子は、「親は子どもに対して無償の愛を与えるものだ」や「親とは子どもに対していつも愛情を抱いているものだ」等、親としての役割や使命に関する項目であるため、『役割・使命』因子とした。第 3 因子は、「子どもは自分の分身だと思う」や「子どもには自分の夢を託したい」等、子どもを自分の分身として子育てを行うことに関する項目であるため、『子どもは分身』因子とした。第 4 因子は、「子どもを育てることは自己の成長につながる」や「子どもの言うこと、することを見ているとおもしろいと思う」等、子育てにおいて充実や生きがいを感じていることに関する項目であるため、『充実・生きがい』因子とした。内的整合性を検討するために α 係数を算出した結果、『負担・制約』因子は.77、『役割・使命』因子は.78、『子どもは分身』因子は.72、『充実・生きがい』因子は.66 と十分な値が得られた。さらに、子育て観尺度の 4 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、『負担・制約』因子得点（平均値2.87, $SD = .90$）、『役割・使命』因子得点（平均値3.77, $SD = .77$）、『子どもは分身』因子得点（平均値2.54, $SD = .50$）、『充実・生きがい』因子得点（平均値4.36, $SD = .51$）とした。

表４　子育て観尺度の因子分析結果

項目名	因子１	因子２	因子３	因子４
子どもを育てることは負担だ。	**.77**	.03	-.08	.07
子どもをもつと精神的に休まらない。	**.72**	.07	.01	.05
子どもから解放されたいと思う。	**.67**	.03	.06	-.05
子どもがいるとやりたいことができなくて焦る。	**.62**	-.04	.08	-.01
親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ。	.06	**.84**	.02	.05
親とは子どもに対していつも愛情を抱いているものだ。	-.06	**.72**	-.01	.15
親としての役割を最優先に果たすべきである。	.03	**.64**	-.09	-.12
親は子ども中心の生活をすべきである。	.03	**.60**	.01	-.19
子どもは自分の分身だと思う。	.10	.07	**.70**	.12
子どもには自分の夢を託したい。	.12	-.07	**.67**	.06
自分の子どもといえども、やはり別個の存在だ。	.12	-.05	**-.62**	.23
子どもは自分の志をついでくれる。	-.06	-.11	**.59**	.04
子どもを育てることは自己の成長につながる。	.07	-.09	-.11	**.84**
子育ては親だけでなく周囲の人と共にするものだ。	.05	-.12	.16	**.50**
子どもの言うこと、することを見ているとおもしろいと思う。	.00	.04	-.01	**.45**
子育てに充実感を感じる。	-.29	.00	-.03	**.37**
子どもを育てることは生きがいの一つだ。	-.26	.23	.15	**.35**

表５　４つのクラスタの子育てにおける怒り表出項目得点の平均値と標準偏差、クラスタにおける多重比較

	①怒り表出低群 ($N=43$)		②怒り表出高群 ($N=17$)		③怒り表出中（ことば表出）群 ($N=36$)		④怒り表出中（遮断）群 ($N=16$)		F 値	多重比較 5％水準
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*		
怒鳴る	1.79	0.51	3.00	0.71	2.22	0.54	1.94	0.57	19.66**	②>①・③・④,③>①
言動に嫌味	1.16	0.37	2.53	0.62	2.10	0.37	1.50	0.52	52.06**	②>①・③・④,③>①・④,④>①
子どもに皮肉	1.02	0.15	2.41	0.62	2.07	0.34	1.25	0.45	89.93**	②>①・③・④,③>①・④
無視	1.80	0.65	2.88	0.33	1.75	0.55	2.38	0.81	17.45**	②>①・③,④>①・③
物に当たる	1.19	0.39	2.24	0.66	1.61	0.49	1.31	0.48	20.33**	②>①・③・④,③>①
取り上げ	1.05	0.21	1.65	0.79	1.58	0.50	2.44	0.51	34.58**	②・③>①,④>①・②・③
たたく	1.21	0.41	1.59	0.51	1.31	0.47	1.38	0.50	2.87*	②>①

**は１％水準で有意、*は５％水準で有意

４．子育てにおける怒り表出程度によるクラスタ作成

怒り表出項目の表出程度に相関がみられたことから、怒り表出は一つのみを用いるのではなく、項目を組み合わせて表出をする“怒り表出パターン”があることが考えられた。そこで、階層的クラスタ分析を行ったところ、４つのクラスタが得られた。４つのクラスタの怒り表出項目の得点の平均値、標準偏差を算出したものを、表5に示す。４つのクラスタの特徴を明らかにするため、怒り表出７項目を従属変数とした分散分析を行った結果、全ての項目において有意な差がみられた。その後、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ（表５）、クラスタ１は他のクラスタと比較して、どの項目についても一番得点が低い、あるいは低い群の一つであり、全体的に怒りの表出が少ない群であると言えるため、【怒り表出低群】とする。クラスタ２は他のクラスタと比較して一番得点が高い、あるいは高い群の一つであり、《たたく》についても平均値は２の「たまにする」に近く、クラスタ１と比較すると有意に高いことから、全体的にどの怒り表出についても

する群であると考えられるため、【怒り表出高群】とする。クラスタ3、クラスタ4はいずれも得点は中程度であるが、その中でクラスタ3は《言動に嫌味》や《子どもに皮肉》の得点がやや高く、ことばでの表出をする傾向があるため、【怒り表出中（ことば表出）群】とする。その一方で、クラスタ4は《無視》や《取り上げ》の得点が高く、怒り表出としてコミュニケーションの遮断を用いていることが考えられるため、【怒り表出中（遮断）群】とする。

5．子育てにおける怒り表出と子育てにおける怒り表出評価、子育て観の関連

怒り表出クラスタごとの子育てにおける怒り表出評価と子育て観の関連について検討するため、子育て観尺度4因子と子育てにおける怒り表出評価尺度3因子との相関係数を算出したところ、表6、7、8、9に示す結果が得られた。【怒り表出高群】は子育て観の『子どもは分身』と怒り表出評価の〈必要性〉との間に有意な正の相関、【怒り表出中（ことば表出）群】は子育て観の『負担・制約』と怒り表出評価の〈必要性〉に有意な正の相関、子育て観の『役割・使命』と怒り表出評価の〈自己批判〉との間に有意な正の相関、子育て観の『充実・生きがい』と怒り表出評価の〈必要性〉に有意な負の相関がそれぞれみられた。【怒り表出低群】、【怒り表出中（遮断）群】では有意な相関はみられなかった。この結果から、【怒り表出高群】は、子どもは自身の分身であると思う人ほど怒りを表出することに必要性を感じていることが分かり、怒りを表出することが多い人の中でも、特に子どもを自分自身であると考えている母親はより怒り表出を必要だと考えて表出していることが考えられる。【怒り表出中（ことば表出）群】は、子育てを負担や制約と感じる人ほど怒り表出をすることに必要性を感じていること、子育てを自身の役割や使命であると考える人ほど怒りを表出することに対して自身を批判していること、子育てに充実や生きがいを感じている人ほど怒り表出について必要性を感じないことが分かった。このことから、子育てを負担と感じる人は負担感情の発散として怒り表出を行っている可能性が考えられること、子育てを自身の役割や使命であると感じている人は怒りを表出した自身を批判していると思われること、子育てに充実や生きがいを感じている人は怒り表出の必要性を感じていないことが考えられ、怒り表出は中程度であり特にことばでの表出が多い人の中でも、子育てに対

表6　怒り表出低群の子育て観と子育てにおける怒り表出評価の関連

		子育てにおける怒り表出評価		
		自己批判	必要性	負担感
子育て観	負担・制約	.02	.15	.12
	役割・使命	.04	.01	-.02
	子どもは分身	.27	.25	-.05
	充実・生きがい	-.05	-.13	-.14

表7　怒り表出高群の子育て観と子育てにおける怒り表出評価の関連

		子育てにおける怒り表出評価		
		自己批判	必要性	負担感
子育て観	負担・制約	.18	.11	-.03
	役割・使命	-.03	.13	.04
	子どもは分身	-.16	.56*	.14
	充実・生きがい	-.04	.45	.32

*は5％水準で有意

表8　怒り表出中（ことば表出）群の子育て観と子育てにおける怒り表出評価の関連

		子育てにおける怒り表出評価		
		自己批判	必要性	負担感
子育て観	負担・制約	.29	.53**	.10
	役割・使命	.41*	-.03	.31
	子どもは分身	.23	-.07	.14
	充実・生きがい	.21	-.35*	.29

**は1％水準で有意、*は5％水準で有意

表9　怒り表出中（遮断）群の子育て観と子育てにおける怒り表出評価の関連

		子育てにおける怒り表出評価		
		自己批判	必要性	負担感
子育て観	負担・制約	.49	-.26	-.06
	役割・使命	.14	.06	.12
	子どもは分身	-.08	.40	.20
	充実・生きがい	-.15	.33	.33

表10　4つのクラスタの子育て観4因子の平均値と標準偏差、クラスタにおける多重比較

	①怒り表出低群 (*N*＝43)		②怒り表出高群 (*N*＝17)		③怒り表出中(ことば表出)群 (*N*＝36)		④怒り表出中(遮断)群 (*N*＝16)		*F*値	多重比較 5%水準
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*		
負担・制約	2.56	1.01	3.26	0.89	2.87	0.64	3.25	0.89	3.97*	②・④＞①
役割・使命	3.89	0.74	3.35	1.07	3.83	0.69	3.80	0.48	2.16	
子どもは分身	2.58	0.53	2.59	0.56	2.51	0.48	2.42	0.42	.44	
充実・生きがい	4.44	0.43	4.19	0.48	4.28	0.57	4.46	0.56	1.53	

*は5％水準で有意

する考え方によって怒り表出への考えが異なっている可能性が考えられる。

怒り表出クラスタ4群の子育て観尺度4因子の平均値と標準偏差を、表10に示す。4つの群の子育て観尺度の因子得点の平均値を比較するため、分散分析を行った結果、『負担・制約』においてのみ有意な差がみられた。その後、『負担・制約』においてTukeyのHSD法による多重比較を行ったところ（表10）、子育て観の『負担・制約』において、【怒り表出低群】と【怒り表出高群】との間、【怒り表出低群】と【怒り表出中（遮断）群】の間にいずれも5％水準で有意な差がみられた。この結果から、【怒り表出高群】と【怒り表出中（遮断）群】は、【怒り表出低群】と比較して子育てに対して負担感や制約を感じていることが分かった。このことから、怒りの表出、特にコミュニケーションを遮断して怒りを表出している人は、子育てを負担や制約と感じているため、負担感情の発散や、負担や制約のもとと考えられている子どもに対して怒りを表出し、さらに表出の方法として、子どもと関わらないコミュニケーションの遮断を用いていると思われる。

全体的考察

本研究では、乳幼児を育てる母親の子育てにおける怒り表出を対象とし、併せて、怒り表出パターンについて探索的に検討した。そして、子育てにおける怒り表出評価と子育て観という認知的側面に着目し、表出との関連を検討した。加えて、上記の目的のために、子育てにおける怒り表出項目、子育てにおける怒り表出評価尺度、子育て観尺度を作成した。

1．尺度の作成

子育てにおける怒り表出項目7項目は、いずれも一定数用いられていたが、多く用いられている項目もあれば、用いられていることが少ない項目もあった。《怒鳴る》と《無視》は多くの母親が用いており、《怒鳴る》という強い怒り表出と、それとは反対の怒り表出を子どもに向けない方法を多くの母親が行っている。《たたく》は多くの母親が用いていない一方で、用いている人も一定数いることが明らかとなり、近年、たたく子育てへの警鐘が鳴らされているにもかかわらず、怒り表出の仕方としていまだに用いられているものであることが考えられる。

子育てにおける怒り表出評価尺度は、子育ての中で子どもに対して怒りを表出することについて、自身の行為を批判する〈自己批判〉因子、必要性を感じている〈必要性〉因子、負担を感じている〈負担感〉因子の3因子から構成されることが分かった。想定していた〈自然体〉因子がなくなり、一部項目が〈必要性〉因子に入ったことから、怒り表出は自然に出てくるというより、必要性があるとして表出していると考えられる。

子育て観尺度は、子育てを負担や制約と考えている『負担・制約』因子、親としての役割や使命と考えている『役割・使命』因子、子どもを自身の分身として子育てを行っている『子どもは分身』因子、子育てに充実や生きがいを感じている『充実・生きがい』因子の4因子から構成された。

2．怒り表出のクラスタ分類および各怒り表出クラスタの子育てにおける怒り表出評価と子育て観の関連

怒り表出は一つの項目のみを用いるのではな

く、項目を組み合わせて表出していることが考えられる。そこで、怒り表出項目の得点をもとにクラスタ分析を行った結果、全体的に怒りの表出が少ない【怒り表出低群】、全体的にどの怒り表出についてもする【怒り表出高群】、《言動に嫌味》《子どもに皮肉》といったことばでの表出を用いる【怒り表出中（ことば表出）群】、《取り上げ》《無視》といったコミュニケーションの遮断を用いる【怒り表出中（遮断）群】の４つのクラスタが得られた。

【怒り表出高群】は、子どもを自身の分身であると思う人ほど怒りを表出することに必要性を感じていることが分かった。このことは、怒りを表出することが多い人の中でも、特に子どもを自分自身であると考えている母親は怒りを表出することに対して必要だと考えて表出していることが考えられる。その他に、【怒り表出中（ことば表出）群】は、子育てを負担や制約と感じるほど怒り表出をすることに必要性を感じていること、子育てを自身の役割や使命であると考えるほど怒りを表出することに対して自身を批判していること、子育てに充実や生きがいを感じているほど怒り表出について必要性を感じないことが分かった。このことから、子育てを負担と感じる人は、負担感情の発散として怒り表出を行っている可能性が考えられること、子育てを自身の役割や使命であると考える人は怒りを表出した自身を批判していると思われること、子育てに充実や生きがいを感じている人は怒り表出の必要性を感じていないことが考えられ、怒り表出は中程度であり特にことばでの表出が多い人の中でも、子育てに対する考え方によって怒り表出への考えが異なっていると思われる。さらに、【怒り表出高群】と【怒り表出中（遮断）群】は、【怒り表出低群】と比較して子育てに対して負担感や制約を感じていることが分かった。このことから、怒りの表出をよく行う人、特にコミュニケーションを遮断して怒りを表出している人は、怒り表出の程度が少ない人と比較して、子育てを負担や制約と感じており、負担や制約のもとと考えられている子どもに対して怒りを表出することや、子どもと関わらないコミュニケーションの遮断を用いていると思われる。以上の結果から、怒り表出項目は、一つ一つ独立して用いられているのではなく、用い方にパターンがあり、さらに、パターンごとに子育てにおける怒り表出評価や子育て観の特徴があることが分かった。用いる表出項目一つから子育てにおける怒り表出評価や子育て観などの認知的側面の特徴を考えていくだけではなく、複数の表出項目の用い方からパターンを想定し、子育てにおける怒り表出評価や子育て観の認知的側面の特徴を考えることも可能であると思われる。

３．臨床的意義

本研究において、《怒り表出》という行動は、子育てにおける信念である『子育て観』と子育て場面での怒り表出における認知的評価という〈子育てにおける怒り表出評価〉という２つの認知的な側面との関連があることが明らかとなった。今後、怒り表出について検討する際に、行動だけに着目するのではなく、認知的な側面についても考慮しながら検討していく必要を示したことが第一の意義である。第二の意義として、子育て支援への活用が考えられる。例えば、怒鳴ることは多くの母親が用いている怒り表出項目であることが明らかとなった。しかし、《怒鳴る》を用いることは子育てに対して負担や制約を感じていることの表れである可能性であることが分かった。このように、悩みを抱える保護者に対する子育て支援や、保育者が気になる保護者の子育ての様子や子どもとの関わり方について、検討する際の着眼点として使用する表出項目や怒り表出パターンを活用できる可能性があるだろう。

４．今後の課題

本研究は、対象が母親であった。湯川（2008）は、怒り表出行動の背景には性別も関係していると指摘している。今回の調査において７名の父親の回答も得られたため、今後は父親についても検討することが課題であろう。本研究では、怒り表出項目の程度をたずねるにあたり、他者を想定しない場面設定をした。しかし、街中などの周囲の目がある場面では、怒り表出が抑制される可能性も考えられる。今後、子育てにおける怒り表出項目の表出程度については、他者の存在や子どもの状態など、異なる状況や場面での表出程度についても検討することが必要であると思われる。

引用文献

Averill, J. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.

陳　東・森　恵美・望月良美・柏原英子・安藤みか・大月恵理子（2006）．乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発――信頼性・妥当性の検討――　千葉看会誌，*12*，76-82.

江上園子（2005）．幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全　発達心理学研究，*16(2)*，122-134.

福丸由佳・無藤　隆・飯長喜一郎（1999）．乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連　発達心理学研究，*10*，189-198.

本田時雄（2004）．大学生とその父母の子ども観および父親・母親イメージの時代推移　文教大学人間科学研究，*26*，87-93.

木野和代（2000）．日本人の怒りの表出方法とその対人的影響　心理学研究，*70*，494-502.

牧野カツコ・中野由美子・柏木惠子（1996）．子どもの発達と父親の役割　ミネルヴァ書房

大野祥子・柏木惠子・若松素子・岡松佐知子（1996）．親にとっての子どもの価値と育児参加　牧野カツコ・中野由美子・柏木惠子（編）　子どもの発達と父親の役割（pp.107-120）　ミネルヴァ書房

杉本　信・並木真理子（2014）．母親の子どもに対する怒り感情の抑制と評価，子育てに関するメタ認知及び育児自己効力感との関連　保育学研究，*52*，279-292.

鈴木　平・春木　豊（1994）．怒りと循環器系疾患の関連性の検討　健康心理学研究，*7*，1-13.

高濱裕子・渡辺利子（2007）．子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情および対処――2歳と3歳との比較――　お茶の水大学子ども発達教育研究センター紀要，*4*，15-25.

湯川進太郎（編）（2008）．怒りの心理学　有斐閣

すみの　ゆうほ（秦野市ことばの相談室）

ふじさき　はるよ（昭和女子大学生活機構研究科心理学専攻（特任教授））